

A-1

【東京歯科大の窓】

歯科医師の目で口腔がんの早期発見を

— 歯科診療所が早期発見の最前線です —

東京歯科大学 口腔健康臨床科学講座 口腔外科学分野
片倉 朗

日本において口腔がんによる死亡者はがんによる死亡者の中で14番目に位置しています。しかし、厚労省の人口動態統計によると口腔がんの罹患率は30年前と比較して2倍に増加し、2015年には現在の約1.6倍に増加することが予測されています。アメリカやイギリスなど欧米先進国では口腔・咽頭癌の死亡率が2003年から減少傾向を示していますが、日本で増加傾向を示していることは口腔を守備範囲にしている歯科医師にとって憂慮すべき事態です。過去5年間で私達の病院を受診した口腔がん患者を調べてみると60%が歯科診療所からの紹介でしたが、初診時の進行度はStage I, IIは37%、Stage III, IVが63%であり、残念ながら2/3が進行がんとなってからの受診されていました。口腔がんの早期発見は歯科医師の責務であり、私達は国民に早期発見の重要性を啓発し、定期検診では歯・歯周組織のみならず口腔粘膜全体を見渡す眼をもつことが必要です。

今回は早期発見の第一線を担っている先生方に、日常で注意を払わなくてはならない粘膜の変化と病変について以下の内容に沿ってお話しします。

1. 日本の口腔がんの実態
2. 歯科医師による口腔がんの予防と早期発見の必要性
3. こんな病変は要注意！！チェアーサイドでの鑑別診断

日歯生涯研修コード：2705

A-2

歯科衛生士に求められるもの

東京医科歯科大学歯学部口腔保健学科
遠藤圭子

近年、人口構造や疾病構造の変化に伴い、歯科保健に関する国民のニーズが拡大しています。このことは、歯科衛生の専門家としての歯科衛生士に求められるものも変化していることを示しています。現在は、日本における歯科衛生士の就業場所の大多数は歯科診療所です。来院する患者の予防や保健指導、歯科診療の補助を担当することが業務となっていますが、さらに、入院患者に対する口腔ケア、介護を必要とする方への口腔ケアなどの重要性が示されていることから、今までは少なかった病院、高齢者施設などでの活動も少しずつではありますが、増加傾向にあります。

私たち、歯科衛生士は、人びとの健康な生活づくりに寄与するために、人びとの希望、つまり「生涯にわたって、自分の歯でおいしく食べ、楽しく会話でき、生き生きと暮らすこと」を叶える役目を担っています。

そこで、今回は歯科衛生士として、必要な基本的なスキル、専門家としての役目、論理的に考える手法などについて、考えてみたいと思います。

①専門家とは何か

②健康意識の向上の裏側にあるニーズ

③対象とする人びとのニーズ判断に基づいて、歯科衛生介入計画を立てたり、実施、評価までの流れを実践できるようなプロセス

④チーム医療を遂行するために必要な事項

⑤治療から予防への発想の転換および健康づくりの支援

健康のとらえ方は、人によっても、世代によっても多様です。若い世代の人は病気がないことを健康ととらえることが多い反面、中高年以降では、生活そのものとの関連、つまり、おいしく食べられる、楽しく暮らせる、友達と愉快地話せるなどの事項を重視して、健康をとらえる傾向があります。歯科衛生士には対象とする人びとの健康観や価値観、希望などの違いを意識した関わり方が大切です。専門家主導の働きかけではなく、対象とする人が主役、健康学習、自ら行動変容できるような支援をする時代へと移行したことも認識して、今後の活動の展開していくことが専門職としての役割でしょう。もちろん、歯科保健医療チームの一員としての立場を理解して、連携・協働することが不可欠であることは言うまでもありません。

歯科医師の指示のみで行動するのではなく、歯科衛生士が専門家として、輝いていられるように、人びとの健康づくりに寄与できる方策を考えたいと思います。

日歯生涯研修コード：2199

P-1

【日本補綴歯科学会東関東支部】

チェアサイドで実施可能な咀嚼機能検査

法の考案

一篩分法への画像解析の応用一

明海大学歯学部機能保存回復学講座歯科補綴学分野¹

東洋大学理工学部生体医工学科

メディカルロボティクス研究室²

○大川周治¹, 奥津史子¹, 栗原美詠¹, 草野寿之¹

松川高明¹, 下川原 忍¹, 曾根峰世¹, 山本裕信¹

秋元俊成², 寺田信幸²

咀嚼は顎口腔系の重要な機能の1つであるとともに、顎口腔機能の主要な部分を占めている。そして咀嚼障害は単に栄養学的な問題にとどまらず、日常生活様式やQOLにも悪影響を及ぼすことになる。したがって、咀嚼機能を客観的に評価する検査法の確立は咀嚼障害に対する的確な診断や治療を行う上で不可欠であり、歯科医学上極めて重要である。従来の咀嚼機能検査法は、咀嚼試料の粉碎度、溶出糖量、咀嚼能率判定表などを分析する直接法と、下顎運動、咀嚼筋筋活動、咬合接触状態、咬合力などを分析する間接法に分類される。これらの咀嚼機能検査法において、方法論的にほぼ確立され、臨床応用が可能な方法は、粉碎能力を評価、判定する篩分法とされている。しかし、篩分法においても、咀嚼試料の篩分、乾燥、重量測定など、分析操作が煩雑で実用化されているとはいえない。そこで、我々はManlyらの篩分法に画像解析を応用し、乾燥処理を行うことなく篩い分け直後における咀嚼試料の乾燥重量を正確に算出するシステムを考案した。その結果、分析時間は大幅に短縮され、本システムを応用することにより、咀嚼機能の客観的評価をチェアサイドで実施しうることが示された。今回は考案したシステムの概要について報告する。

P-2

【日本補綴歯科学会東関東支部】

CAD/CAMを用いたオールセラミックの臨床

日本大学松戸歯学部

クラウンブリッジ補綴学講座

日本大学松戸歯学部附属病院

補綴科・口腔インプラント科

○小林 平

近年、Computer Aided Design/Computer Aided manufacturing (CAD/CAM)の歯科領域への応用により、従来熟練の技工士に頼っていた操作が簡略化され、またさらなる技術開発によって適合精度も向上し、コア材としてセラミックコーピングにジルコニアを使用することでブリッジへも応用範囲が広がり、歯冠修復治療における修復材料の臨床的選択基準が大きく変化している。

メタルセラミッククラウン（陶材焼付鑄造冠）は長期的な予後において優れた方法であるが、金属を使用するため、オペーク陶材でマスキングの必要があり、入射光が反射、散乱する割合が多くなり、明度の高い不自然な色調を呈しやすいという審美的な問題を有している。

これらの欠点を補うべくして開発されたオールセラミッククラウンはその構造から大きく2種類に大別できる。一つはメタルセラミッククラウンのメタルに相当するコーピングをアルミナやジルコニアといった強度が高いコア材で作成してポーセレンを築盛するもの。もう一つはコア材を使用しないものである。どちらもCAD/CAMで作製可能であるが、コア材としてジルコニアを使用することにより、メタルと同程度の強度を得ることが出来るようになり、従来のメタルセラミッククラウンと同様に、臼歯部のクラウンやロングスパンのブリッジにも応用でき、仮着も可能である。しかし、CAD/CAMでコーピングを作製するために、支台歯形成の形態や症例として応用するケースに若干の注意が必要となる。

今回のテーブルクリニックでは、CAD/CAMで作製するジルコニアをコア材として応用する、オールセラミックの臨床と題して、ファイバーコア+レジンによる支台築造、支台歯形成、最終印象、調整、装着の一連の診療の手順を再確認し、臨床ケースのご紹介をさせていただきます。

P-3

【日本補綴歯科学会東関東支部】

舌接触補助床（PAP）の適応症と応用上の 注意点

東京歯科大学有床義歯補綴学講座
東京歯科大学千葉病院
摂食・嚥下リハビリテーション・地域歯科診療支援科
杉山哲也

近年、摂食・嚥下障害の機能改善を目的とした義歯型の補助具が、舌、口唇および軟口蓋等の感覚や運動障害の補助および改善のために使用される頻度が増加してきている。義歯型の補助具の中でも舌接触補助床（Palatal Augmentation Prosthesis：PAP）は、今年度から保険診療に導入された。本装置は外科的切除や脳血管障害などに起因する、舌の運動障害を有する摂食・嚥下障害や構音障害患者への応用が有効であるとされており、これらの症例に対して広く用いられることが期待されている。しかし、適応症、有用性、効果的な使用方法および製法などについてのエビデンスに基づいた明確な基準は示されていない。そのためPAPは、いまだ広く普及しているとは言い難い状況にあるといえる。

日本老年歯科医学会では日本補綴歯科学会と連携して「舌接触補助床（PAP）のガイドライン（案）」を作成し、発表した（老年歯科医学，第24巻第2号104～116頁，2009年）。この中でも述べられているように、PAPについては今後さらに多施設における臨床研究によりエビデンスを積み上げていくことが必要であるが、現時点において分かっている有用性や適用法もある。

今回のテーブルクリニックでは、PAPの適応症や有用性、応用上の注意点などについて、これまでの研究結果と我々の臨床例をもとに解説していきたい。

P-4

【日本補綴歯科学会東関東支部】

ハード&スペースタイプマウスガードの 製作方法

東京歯科大学スポーツ歯学研究室
○黒川勝英，中島一憲，佐藤武司
武田友孝，石 惠一

当研究室では、適合性に優れ、正確な咬合を有し、かつ安全性の高いマウスガード（MG）の開発・普及に努めている。カスタムメイドタイプのMGは市販のものに比べ、顎口腔系外傷予防・軽減のために必要な衝撃吸収性に優れかつ違和感が少ないという利点を有しており、徐々にではあるが様々なスポーツにおいてその使用率が高まってきている。そして、これまで多くのスポーツ歯学に関する研修およびテーブルクリニックなどでは、最もスタンダードな一枚法バキュームタイプや二枚法ラミネートタイプのMGの製作が中心に行われてきた。

しかし、競技種目やレベルによっては通常のエチレン酢酸ビニル（EVA）などの軟質材で製作したMGでは、防ぎきれない外傷も少なくなく、また一度保存・補綴治療など施された歯は外力を受けるとMGを装着していてもダメージを受ける傾向にある。そのほかにも、MGがより多くのスポーツで使用されるようになってきたため、より汎用性が高く、かつ外傷予防効果の優れたMGの普及が望まれている。

そこで今回、当研究室が開発した新しいデザインのMGの製作方法を紹介したい。すなわち、EVA材の間にアクリルなどの硬性材を挿入し、かつ歯面とMGの間に一層のスペースを設けることにより、さらに外傷予防効果を高めた三層構造タイプのMGの製作方法、およびその際の注意点などである。